《歌舞伎座の思い出》

初代吉右衛門と様々な役者達

昭和三十八年卒　崇島弘安

平成二十一年一月、歌舞伎座さよなら公演第一回を観劇しました。この公演は二十二年迄続きます。
さて、私が大歌舞伎を見初めたのは、昭和二十八年、中学二年の時でした。
その頃、歌舞伎座と松竹会館との間には、川がありました。
大きな興行の時に、私は朝早くから切符を求め、当日売りの窓口に並びました。
その時、川からの異臭が強く鼻につきました。川は今、高速道路になっています。
歌舞伎座の所在地を、木挽町と呼んでいました。今は東銀座と地名が変りました。
今の歌舞伎座は昭和二十六年、戦災から復興し、建て直されたものでした。それは見事で、天下にその偉容を誇りました。その外観と内部の仕様は、新聞等で頻繁に紹介されていました。
それから半世紀、歌舞伎座は役者だけでなく、我々好事家の精神的支柱でした。数多くの名舞台を見せてくれました。私達を感動しつづけました。
ただ、一方で不具合もありました。前の席との間隔が不充分でした。一万八〇〇〇円も払って、いざ座ると前に大きな頭、大きな髪の女がいると、もう駄目です。始終、頭を動かしてないと、舞台が見えません。
アンラッキーな半日となりました。
内装は美しく、華やかです。ところが施設が不充分です。エレベーターもエスカレーターもありません。まことに老人泣かせです。
一幕見の制度はとても親切だと思います。しかし、あの長い長い階段を考えると、二の足を踏みます。
随分前から改築の噂を耳にしていましたが、今ここに大きな動きが出た事は、まことに喜こばしい事です。
再び、私の観劇の話に戻ります。
明治・大正・昭和の名優を団・菊・佐・菊・吉と云っています。
子供の頃、団十郎はああだった、こうだった云う老人がいました。世にこれを団十郎爺【じじ】いと呼んでいました。内輪のことで恐縮ですが、私の祖母も云っていました。
「弁慶役者だけど、可愛い娘にもなってしまう。不思議だ【ねえ】」
江戸っ子の祖母は、さしずめ団十郎婆【ばば】あでした。
私にとって、団菊佐は大昔の人達でした。六代目菊五郎も数年前に没していました。
わずかに、初代吉右衛門を観ることが出来ました。これは私の貴い財産です。
ただ、「歌舞伎座の思い出」では散漫になります。そこで、初代吉右衛門に多くの紙数をさきたいと思います。

一、初代吉衛門
吉右衛門は所謂名門の出ではない。それでも大きな役者になった。たゆまぬ稽古、研究心。それに、もともと天生なものがあったのでしょう。
浅草で子供芝居の時、座頭をつとめた。役役は大当りをとり、やがて、それが後年の当り芸となった。
明治二十八年、二〇才の時、歌舞伎座で名題昇進。古典歌舞伎を充分身につけた、重みのある優だった。
菊吉と並び称せられました。これについて、六代目菊五郎は、「俺はもともと名家の出だが、吉右衛門が俺に伍すとは、大した役者だ」と云った。
菊吉は演技で火花をちらした。双方のサポーターも大変なものでありました。
吉右衛門は九代目団十郎を崇拝していました。吉右衛門の口跡はすばらしいものでした。様式の中に人間を織り込んでいました。
私の眼に焼きついているのは熊谷陣屋です。昭和二十九年七月、歌舞伎座です。
体力は大分弱っていましたが、恩ある人の為でした。
その恩ある人とはパワーズと云う人です。戦前も日本に来たことがある人でした。そして、今度は進駐軍の総司令官マッカーサの副官として再来日しました。
日本の飛行場に着くなり、質問しました。
「羽左衛門は元気か？」出迎えた記者は歌舞伎を知らない政治部記者ばかりです。
記者達は目を白黒させていました。
その頃、進駐軍は日本の報復を怖れていました。忠臣蔵など、報復物は上演禁止です。
戦前から歌舞伎を観ていたパワーズはそれを除々に解禁しようとしました。
それで、わざわざ志願して、副官から検閲課長へ降格したのでした。
パワーズは精力的に上演復活に尽力したのです。
吉右衛門は、パワーズの再々来日に際し、その希望に副い、熊谷陣屋を出しました。
もう体力がないので楽屋住いでした。
花道の引込みは、もう限界でした。
「十六年は一昔、夢だ、夢だ！」はお爺さんになっていました。
その翌々月九月の歌舞伎座は七代目松本幸四郎の七回忌追善興行でした。
追善口上は、三津五郎、時蔵、勘三郎、歌右衛門、幸四郎が居並びました。
八代目幸四郎は勧進帳の弁慶を演じました。九月五日、勧進帳上演中に吉右衛門の訃報が届きました。八代目は花道を引込むと、弁慶の扮装のまま車に乗り込み、歌舞伎座を後にしました。
その翌日、七代目の追善口上が終り、一亘幕が引かれた。そして、弟の時蔵、勘三郎、女婿の幸四郎が、幕外に登場、威儀を正して挨拶した。
この間の事情を、大先輩の戸板康二は次のように述べていた。「かういふ時、臨機応変に、旧友を失なった三津五郎には三津五郎として感想を口上の中で述べられる訳にはゆかない

のだろうか」
翌三十年九月、歌舞伎座で吉右衛門の一周忌追善興行があった。三津五郎、時蔵、猿之助、勘三郎、幸四郎、歌右衛門が一座した。昼の幕開きは、「弓播磨偲巧【ゆみはりましのぶいさみし】」と云うだんまりがあった。故人の当り役が次々登場した。
仁木弾正、一条大蔵卿、熊谷直実、佐々木盛綱、河内山宗俊をそれぞれ、中車、宗十郎、段四郎、又五郎らが扮した。
二条城の清正が出て、これは幸四郎が演じた。

二、十七代目羽左衛門

七代目坂東彦三郎が十七代目市村羽左衛門を襲名すると云う。私達は羽左衛門と聞くと、十五代目を想像します。
坂東彦三郎は、およそ十五代目とかけ離れた芸です。助六はおろか、弁天も与三郎も出来ない。
人々は、唐突の感を抱いた。そして、継承の正当性を訝かしんだ。しかし、十三代目羽左衛は五代目菊五郎の前名であり、その孫と聞いて納得した。
昭和三十年十月、歌舞伎座で襲名披露公演が行われた。披露狂言は石切梶原でした。

三、大和屋五代

七代目坂東三津五郎は踊りの名手でした。飄諷とした踊りは見ていて楽しいものでした。
喜撰法師は今に瞼に残ります。明るく、軽快華やかな芸でした。
六代目菊五郎をして、三津五郎には踊りではかなわないと云わしました。
女婿が八代目を継ぎました。博学の覚えの高い人でした。ただ、死に方で有名になってしまったのは残念です。その死に方ですが、なんとふぐ中毒死だったのです。
だから、「あのふぐ中毒死」の三津五郎と枕に振られるようになりました。
九代目は、六代目菊五郎、二代目松緑の教えを受けた、実直な優でした。八代目と同じように女婿でした。
さて、現三津五郎です。久しぶりの男子誕生です。七代目はとても喜び、歌舞伎座の幕外へ、幼い十代目を抱いて出ました。たしか、俳優祭の時です。
十代目の現三津五郎の活躍は目ざましいものがあります。ご高尚の通りです。
息子の巳之助はいずれ十一代目を継ぐのでしょう。
私は、実に五代に亘り歌舞伎座で大和屋を観て来たことになります。

四、梅蘭芳
めいらんふぁん。趣きを変えて、京劇です。京劇の名女形、梅蘭芳は中国を代表する優でした。中国人の心をあまねく体現すると云われていました。

その梅蘭芳が日本に来ました。昭和三十一年のことです。私は歌舞伎座で「貴妃酔酒」を観ました。これは私の貴い観劇歴の一つです。
この三月、映画「梅蘭芳」が上映されました。それによると、戦前にも日本に来たことがあるそうです。

六、沢村小主水

昭和三十年前後、浅草松屋デパートの中にスミダ劇場がありました。そこにかたばみ座が常打ちしていました。小芝居でしたが、NHK が中継放送をする程の本格歌舞伎でした。
一座に女形に沢村小主水がいました。
役どころは光秀妻皐月と云ったところです。かたばみ座はその後なくなりました。
ところが、近年、歌舞伎座の筋書で、再び小主水の名前を見つけるのです。
私はびっくりしたので、確認したところ、同一人物でした。私はとても不思議に思いました。これも歌舞伎のなせる業かと。

結び
歌舞伎座の歴史は、一方で自分達の歴史であります。あの時はああだった。こうだったと自分がだぶります。
歌舞伎は今とても隆盛です。東京では、歌舞伎座の他に二、三ヶ所で幕が開く程です。

ひと頃、歌舞伎座の八月は三波春夫、美空ひばり、十二月は大川橋蔵でした。
まさに雲泥の差です。
松竹としては、当然このまま維持したいと考えていたのでしょう。
それが決断を長引かせていたように思います。
数年先の、新しい歌舞伎座を夢みます。
新しい歌舞伎座に大いなる期待を寄せます。

平成二十一年六月記

崇島弘安君(昭和 38 年卒)は平成 21 年 9 月 14 日ご逝去されました。
歌舞伎研究会三田会の活動にはご協力頂きました。「三田歌舞伎」にもこの投稿が二度目で有りこのご投稿の数ヵ月後に永眠され遺稿となりました。会員皆様に是非お読み頂きたくぞんじます。
心からご冥福をお祈り申し上げます。